

## 御開帳の「当たり年」

引間 隆文

ノーラ名栗のグランドオープンや大河ドラマ『青天を衝け』の放映など、今年は飯能の観光にとってまさに「当たり年」。コロナ禍が無ければ、今以上に賑々しかったことでしょう。同様に、大光寺(大字川寺)と竹寺(大字南)の御開帳も、この「当たり年」を彩る行事の一つと言えます。



大光寺 虚空蔵堂

大光寺では、県指定文化財である虚空蔵菩薩像が4月に御開帳されました。竹寺では牛頭天王と八王子の像が、12月まで御開帳されています。いずれも12年に1度、丑年の御開帳です。

御開帳(開帳・開扉)とは、寺社において普段公開していない秘仏や秘宝を公開することを言います。古くから行われていましたが、盛んになったのは江戸時代のことです。御開帳には、大きく分けて居開帳と出開帳があります。居開帳は、秘仏や秘宝を所蔵している寺社で行われる御開帳のことであるのに対して、出開帳はその寺社の外に秘仏や秘宝を持ち出して御開帳することです。



竹寺 牛頭天王社

かつて江戸では、各地の寺社が出開帳を行っていました。中でも善光寺(長野県)や成田山新勝寺(千葉県)などが人気で、会場となった寺の門前には芝居や見世物の小屋が立ち並ぶほどでした。

江戸での出開帳は、秘仏との結縁という江戸の人々の信仰心(若しくは好奇心)に応えるとともに、信者の新規獲得など経済的なメリットを寺社にもたらしました。そのため堂宇の整備費用などを集めるために催されたりもしました。ただ、必ずしも成功するとは限らず、場合によっては赤字となることもありました。

飯能市域の寺社では、記録に残っている限りでは、子ノ権現が江戸での出開帳を7回催しています。そのうち享保15(1730)年に行われた第2回目の御開帳ではかなりの収益を上げ、堂宇の整備を進めることができたのですが、元文元(1736)年に行われた第3回目はあまり振るわず、危うく開催経費すら賄えない事態となるどころでした。

今年は、御開帳や記念行事の「当たり年」となるはずでした。全国から参拝客が押し寄せる善光寺御開帳の年であり、聖徳太子没後1400年、伝教大師最澄没後1200年、立正大師日蓮生誕800年の年でもあることから様々な記念行事が行われるはずでした。しかし、コロナ禍により延期や縮小を余儀なくされています。そのような状況下にも関わらず、ここ飯能で貴重な御開帳が2ヶ寺で執り行われたのは、偏に関係各位のご尽力の賜物です。秘仏のお顔を間近に拝しながら、感謝の念を捧げずにはられませんでした。

幾度も疫病の流行をご覧になってきた御仏は、今の世をどのようにご覧になっているのでしょうか。

### 【参考文献】

飯能市郷土館 特別展図録『山上の霊地』平成24(2012)年

坂本要「開帳」「出開帳」『日本民俗大辞典』吉川弘文館 平成11(1999)年